

# 中高生とともに差別と闘う

## 「無知は宝の山」

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



**自分を語る人権学習**

高二のAが語る川崎病。誰かが発する「ひとこと」の大切さ。高一のSが語る「個性について」から死刑制度に至るなかで議論された、「平行線を手をつなぐ」という行為。それでも手をつなぎ合おうとする勇気や知恵、根気強さ。私は語り合うことの大切さを、子どもたちからあらためて学ばせてもらった気がします。

最後の人権を語り合う中学生交流集会、講演会パネリスト。三人めは、高校二年生のM。内容は、「ハンセン病問題と父母について」。話は、前年に人権こども塾一泊研修で訪れたハンセン病療養所での夜の研修の場面からはじまりました。

「そこで私がマイクを握って話した。なぜあのとき、あの話をしたのかっていうことについて話したいと思います。」

何を話したかっていうと、自分の親のことについて話しました。私の両親は難病を持っています。今も、この医療が発達したなかですぐ治りません。治療法は見つかっていません。両親とも病気が違いますが。それで毎日薬が手放せない生活を送っていて、母はそれのことを隠しながら仕事をしています。父は去年転職して新しい仕事をやってるんですけど、障がい者雇用として働いています。」

**「無知は恥」、か**

そんなMがハンセン病元患者から、一切家族とは交流していない年に数回は会えても離れて暮らして

ている、と聞かされた話を、自分に落とし込んで語ります。「自分かもしその立場だったら、私は耐えきれなくなって思ったんです。私は両親のこともそうなんです。妹のことも尊敬して。両親は病気を隠しながら仕事してたり、就職差別にも遭った当事者で。コロナ禍にちょうど緊急事態宣言が出た最中に入院したことがあったんですね。父が。そのときでやっぱり面会謝絶で、誰も面会できない状態でした。三カ月ほど離れて生活していました。自分はそのとき小学校四年生か五年生だったかな。すごくつらいし、寂しい思いを経験しました。けど病院では父もつらい思いをしているだろうし、しんどい思いをしているだろうと思うと余計につらかったし、会えない、電話でしか話せないっていう状況が続いたのがすごくストレスでした。」

でもそのことを周りの友達に言ったら、Mの家は何かちょっと違うよなみたいな反応をする子が多い。それがすごい悔しくて。他の家と比べると母がいないのに、頑張っている父と母がいないのに、そんな反応されたのがすごく悔しくて。

ハンセン病のことを学んだときに、元患者の方たちの思いについてのが、自分事のように思えてすごく悔しかったし、その日に詳しく学んでいくにつれて、二度と起こしてはいけないことだなんていうのを感じました。

夏休みにそのことについて作文を書いたんです。自分の思いを最

後に書いたんです。私は、「無知は恥」だなんてすごく思っています。何でもそうなんですけど、いろんな人権問題に通じる部分があると思うんです。新型コロナとかハンセン病問題とか狭山事件もそうだし、いろんな人権問題って、正しい知識を知らずに間違えて理解してしまうのはすごく怖いことだし、いけないことだと思ってるんです。自分の学校とか、ここにいるみんなとかにもちゃんと正しい知識を知って、人権意識を変えて、他人事ではなく自分事に捉えて、人権問題を少しでもいい方向に持っていったらいいと思います。」

**無知は宝の山**

個人的には何度も聞いた話ですが、知らない大勢の前で話したの、これが初めてでないかと思えます。個人的なことといえませんが、それでも自分や家族のことを、切々と、堂々と語り切る姿は、尊いというか言いようがありません。賛同の意見も飛び出したほどでした。

ところがこの発表に、待ったをかけた者が出てくるのです。一人めに発表をしたAです。

「無知なことが恥なのか。知らないというところが恥ではなくて、知らないということが本当に恥ずかしいんじゃないかなとも思っています。たとえ無知な状態であっても、知るところとする、その意思がある人は、恥ずべきことじゃないんじゃないかなって、今日の話を聞いて思いました。」

確かにそうです。でも、異論を唱えるには勇気が必要です。受けとめようによっては、対立の構図になりかねませんから。でもそうではなく、仲間と知恵を出し合い、深掘りしていくことで、新たな気づきが生れます。知らないことを知ったとき、震えるような感動やよるこびが生れます。それは、その場にいるみんなの共有財産となり、次に踏み出す一歩へとつながるのです。言葉を重ね、知恵を合わせ積みあげていくことの大切さ。そう思うと、無知とはあながち悪者ではなく、実は「宝の山」だったりするのではないかと思えます。

人権こども塾もそうです。困難さの只中に置かれなければ生まれなかつたかもしれせん。そう思うと、生みの苦しみはあれど、苦しみてなお、それを越えて余りある生みのよるこびがあるように思うのです。

あらためて、語り合う経験の必要性と重要性を感じます。自分と異なる意見や考えをすぐにシャットアウトし、敵視しがちな風潮があります。それは本当にもったいないこと。分り合える可能性に蓋をしてしまうかもしれないからです。

こうして最後の中学生集会は、高校生たちの踏ん張りもあり、三十年の歳月に幕を降ろしました。

中学生集会の全記録は、T-over 人権教育研究所HPからご覧になれます。

# 国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人の世に熱あれ 人間に光あれ<sup>18</sup> ～仲間と共に希望のゴールへと進む～

## 1991年度中同研大会公開授業における最後の語りと生活ノート

1991年度板野中学校3年B組が、6月の郡同研(板野郡同和教育研究大会)、10月の全道研(全日本中学校道徳教育研究大会)、そして、この中同研(徳島県中学校同和教育研究大会)へと積み上げてきた語り合いの部落問題学習、その集大成となった中同研での最後の発言と、この公開授業につかんだ思いを誠実の表現した生活ノートである。

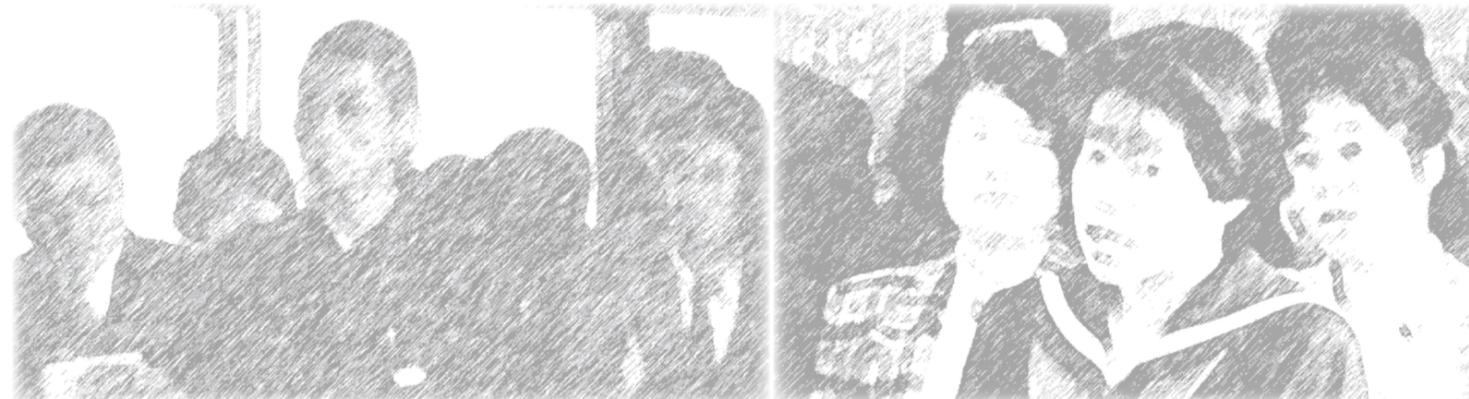
## Y・Iの語り「今日灯った部落解放の光と炎(灯火)を差別解消の日まで灯し続けよう」

もう時間がきてしまっていて言いたいのには言えなかった人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だったことを誇りにして、これからもずっと頑張りたいと思います。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かっていかなければいけないと思います。

そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎(灯火)を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に向かっていきたいと思っています。

そして、この光と炎(灯火)を大切に燃やし続け、私たちのこれからの人生において出会う人にこの光と炎(灯火)をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなっていると思うんです。

だから今ここにおいて先生方も、私たちのこれだけ頑張った姿を見てくれたんだから、この光と炎(灯火)を絶やさずずっと差別解消の日まで頑張りたいと思います。



## H・Iの生活ノート「板野中学校で燃やした炎を誰かにつないでくれたらと思う」

部落問題学習でつかんだもの、それは3年B組という固い団結の絆だと思う。一人一人の悲しみが怒りとなって語り合い、そして支え合っている。

公開授業が終わったとき、男の先生がぼくのところにきて、「頑張ったなあ」と言ってくれた。ぼくはものすごくうれしかった。発表して本当によかったと思った。この先生だけでなくほとんどの先生たちが、この学習の大切さをわかってくれたと思う。この3年B組で、この3年生で、そしてこの板野中学校で燃やしたこの炎を、多くの先生たちが、また誰かにつないでくれたらと思う。

自分の思いを語っていくことによって、自分という人間が変わったと思う。2年生に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。

そして、朝がさわやかに感じられ、人の優しさというものが見えてきたと思う。今日帰るときコスモスの花が、太陽に照らされていた。まるでぼくに勇気をくれているような気がした。

過去を背負うのではなく未来に希望を持ちながら、頑張っていきたいと思う。これからも悲しさではなくうれしさで、そして嘆くよりも怒る気持ちで、これからも峠を越えていきたいと思う。支え支えられてこれからも、自分というものを見つめて頑張っていこうと思う。

今日帰るとき、女の先生から声をかけられた。「授業、感動しました」と言ってくれた。ぼくは「学校に帰ってからも同和教育頑張ってください」と言った。後でもっといろいろな話をしたらよかったと思った。でも多くの人の心が動いてくれたことがうれしい。こうしてくれる人たちは学校に帰っても頑張ってくれると思う。ぼくも人任せにならないように頑張っていくつもりです。

果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたっぶり浴び、空気を思いきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても、弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」 うずしおランチ共同代表 森口 健司